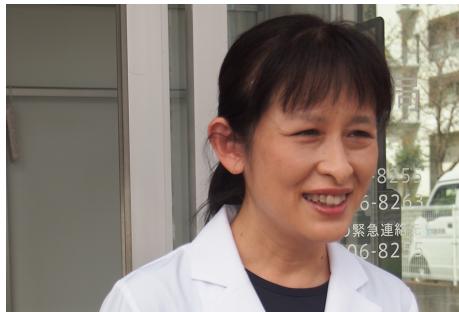


対人業務を考える ーがん患者フォローアップ編ー

フローチャート式「副作用の対応」を用いて がん患者へのフォローアップを実践 (1/2)



薬樹薬局船橋金杉（千葉県船橋市）

ストアマネジャー 大西 美恵子氏
管理薬剤師

がん診療連携拠点病院の船橋市立医療センター（千葉県船橋市）に隣接する薬樹薬局船橋金杉では、ストアマネジャー・管理薬剤師の大西美恵子氏を中心に、フローチャート式「副作用の対応」を用いてがん患者さんへのフォローアップに取り組んでいます。同医療センターとの情報共有など連携関係の下に、患者さんとコミュニケーションをとりながら、有害事象の予防、その影響の最小化に努めています。今回は、がん患者さんのフォローアップを中心に、お話をうかがいました。

今号の ポイント

1. フローチャート式の一覧「副作用の対応」を活用して患者の意識高める
2. 患者と信頼関係を築き、趣味や好きな食べ物など「やりたいこと」を情報共有

がん専門医療機関での研修を経て「体調管理ツール」を開発し活用

船橋市立医療センター（以下、医療センター）はがん診療連携拠点病院に指定され、多くの患者さんが外来がん化学療法を受けておられます。近隣には当薬局を含め4薬局ありますが、当薬局の患者さんの多くが医療センターの患者さんで、外来がん患者さんは毎日10名ほど来局します。がん患者さんの場合、がんの種類とレジメン、何クール目か支持療法は何かなど、最適な薬物療法を継続していただくためには、多くの情報が必要だと考えています。しかし、以前は処方箋だけの情報でしたので、個々の患者さんがどのような治療を受けているのかはよく分かりませんでした。

2015年頃から、近隣4薬局と薬樹連携の一環として医

療センターとの勉強会は行っていたのですが、やはり院内での治療の流れや患者情報を知る機会は少なく、外来がん患者さんへの適切なフォローという面で、さらに連携できることはないか模索していました。ちょうどその頃、弊社では国立がんセンター東病院での実務研修の社内募集があり、がん治療の実状を理解する絶好の機会だと思い参加を決めました。

その時の研修では、東病院で作成された『副作用で困ったら』という資材が患者さんの間で活用されていました。そこで研修終了後に、その資材を参考に本社メンバーとも協議して、抗がん剤による副作用の状態、レベルに応じた対応の仕方をフローチャート式の一覧「副作用の対

応」として取りまとめ、2020年から運用を始めました。最近では免疫チェックポイント阻害薬（ICI：Immune Checkpoint Inhibitor）を使用する患者さんが増えましたので情報を追記しました。

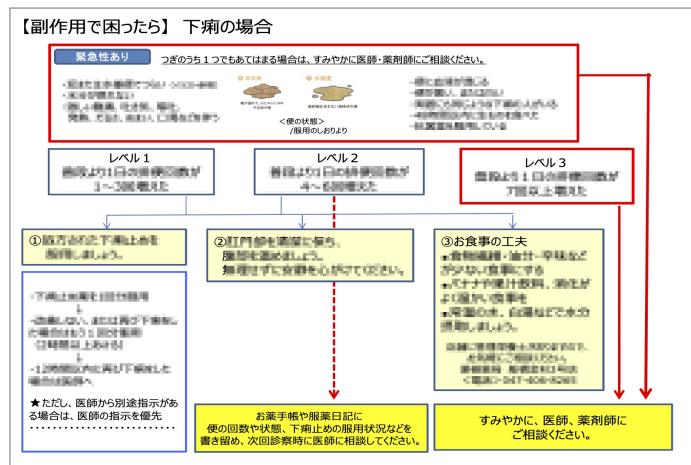
これまでに吐き気、口内炎、下痢と便秘、末梢神経障害（手足の痺れ）、手足症候群、高血圧、咳など8種類の副作用を対象とし、直近のICIを含め一冊16ページほどになります。抗がん剤による有害事象、副作用については、患者さんご自身やご家族によくご認識いただく必要がありますので、十分に説明した上で、副作用ごとの用紙を患者さんにお渡していました。しかし、全体を知っていたく必要性を感じ、現在は必要に応じて1冊まとめてお渡しています。

従来の化学療法、つまり細胞障害性の抗がん剤は、白血球が低くなるなど副作用の好発時期が分かりますので、患者さんにも理解がしやすかったと思います。しかし、ICIの場合は、投薬後少し経過した時期にも副作用が出ることがあります。そのため長い期間に渡って、私たち薬局薬剤師がフォローアップしていく必要があります。

患者さんには「体調の変化があった時には必ず教えてく

ださい」と伝えています。SNSでも患者さんとつながっていますので、時機をみて体調の質問をするなど、患者さんの体調管理をより丁寧に支援しています。特に私のかかりつけの患者さんの場合には、半年に1度は通院されるので、通院予定が近づいた頃にSNSで体調などを聞きしています。その回答によってはトレーシングレポートに記載して医療センターと情報共有しています。

● フローチャートの例



がん治療に限らず患者さん自分で「体調変化に気づく支援」が必要

がん化学療法に限らず、患者さんご自身で体調変化に気づいていただく必要がありますので、よく理解していただくよう努めています。そのためにも患者さんとのコミュニケーションは重要です。そこで私は3つのポイントを大事にしています。①患者さんとの信頼関係を築く、②趣味や好きな食べ物などの情報を共有する、③患者さんが「やりたいこと」を聞く、という3点です。

信頼関係の構築については、なるべく初めに提案して、かかりつけ薬剤師にしていただくようにしています。毎回同じ薬剤師が対応し、患者さんが希望や気持ちを話しやすい環境づくりを心掛けています。例えば、ツアーコンダクターのようなイメージで横に並んで共に歩んでいくという姿勢で信頼関係を醸成しています。

また、好きな食べ物などを聞いておけば、食欲がない場合、例えば患者さんが「大好きなメロンも食べられないんだ」となれば副作用による食欲不振のレベルも

相当な状態だと分かります。趣味を知っていれば、患者さんの希望を引き出しやすくなります。

「やりたいこと」を聞いていれば、ある程度の治療スケジュールを調整する支援もできます。抗がん剤の場合、どうしても副作用の影響が大きく、休薬期間を含め長い期間を要するので、ご本人のやりたいことができなくなってしまうことがあります。そこで例えば、「旅行計画があれば主治医に伝えておくことが大事ですよ」とアドバイスしています。

ある患者さんが「石垣島に行きたい」と希望されていました。早めに主治医に伝えたことで、副作用を配慮した治療スケジュールを組んでもらい、無事に旅行ができたと喜んでおられました。出来ないと諦めるのではなく、好きなことややりたい事をなるべく諦めないで良いよう薬剤師が寄り添うことで、患者さんも治療に前向きに向き合えるようになると感じています。